

本学FD活動への学生参画の必要性和注意点

都市教養学部人文・社会系・准教授
山田 昌久

岡山大学で実施された今回の教育改善交流ワークショップに参加した感想（特に私がかかわったワーキンググループでのもの）をまとめる。そして、今後の本学のFD活動への学生参画についての展望を示しておく。

岡山大学では、昨年度の教育改善交流ワークショップで、学生から提案された授業案を採用した「コンビニの経済学」という授業が本年度開講されている。他大学によって先行されているこうした実践例は、本学のFD活動にとって貴重な参考例である。学生からのこの授業提案は、つまるところ「身近なところへ引き付けて、経済学を理解するような授業であってほしい」ということなのだろう。これを、「学生の抽象的理解力の低下とかかわっている」と評価するだけでは、これからの大学教育をどうするかという議論は深められない。学生の提案は、大学教育において基礎教養をどのように学生に伝えるかについて、これまで教員側が考えてきたことと、学生側の受け止め方との間にあった差異を、しっかりと見極める必要があることを示しているのだと考えられる。

さて、今回発表された各大学の学生参加型の諸活動は、①大学の授業を基礎から考えるもの、②具体的な授業実践例のもの、の2つに類型化できる。どの大学の事例も、熱心な取り組みであることは伝わった。しかし、率直に言えば、それらの活動が各大学においてどのように評価・認知されているのかという部分は、まだ明らかになっていないようで、効果の判断情報は十分に提示されてはいなかったようである。

たとえば、私は横浜国大の実践例のワーキンググループに参加したが、できればこの活動について、提案者以外の周辺学生がどのように受けとめているのか、の追跡調査してみたいと考えた。この提案は「授業への集中・授業進行への参画」によって授業改善を図ろうとするものであった。提案者の学生は、カードを使って意見を交換しさらに意見を分類し検討していくという手法に

よって、受講者参画型の場面を作り出すことで作り出した「授業への集中効果」を、「盛り上がる、つまり授業への積極的な参画」がしきりに訴えられていた。

しかし、参加した私は受けとめる立場に立ったことにより、やはりその流れについて行くことになった。このことから考えたのは、たとえ「参画型の授業」でも、教員の作った授業案であれ学生の作った授業案であれ、「授業」には「提示者」と「受容者」という立場が、存在するということである。つまり横浜国大グループ提案の「授業改善」方法は、「学生」を提案者に加えるというだけでは不十分で、「受容者」から「参画者」へ促す工夫の追及、が必要だということが、浮かび上がってきたのである。

誤解を招かないように、言っておかなければならない。私は、今回の研究集会の各項目に意味が無いといっているのではない。むしろ、動き出したこれらの活動が、その大学の周辺学生にどのように受けとめられ育っていくのかを、今後とも継続して検討していくことが必要だということである。大学の基礎授業の新しい方向を模索するFD活動は、単年度で効果を判断できるものではなく、単年度ではない、中・長期的な効果判断が必要である。試行→検討→再試行といったプロセスを経て作り上げるものなのだ、ということ認識したのが今回の参加の成果である。

首都大学東京のFD活動にも、学生参画型の実践は必要であることは間違いないであろう。しかし、それは即効的な効果を期待してはならない。教員・職員・学生の参画者そして大学管理者が、単年度目標と中長期目標を共有し進め、速成を求めずに創出努力継続が求められると考えるのである。意欲的な学生の意見提出と、それを受け止めての実践を勧める、学内の教職員の中・長期的な体制づくりが急務といえるであろう。